

○ 西武土地開発
 東京工業大学
 東京工業大学

正倉 貞一
 正倉 安島 博幸
 正倉 齋藤 翔

1 問題意識と研究の目的

港湾再開発の要請は、精神的・物理的に遠い存在になってしまった港を再び市民の手に取り戻す契機となるだろう。港とまちを一体として考えていくという発想の中で、市民にとって港を体験的に身近なものにするための方策が探求されねばならない。本研究はそのための基礎研究であり、以下の2つを目的とする。すなわち、
 ① 港の魅力の構造を明らかにする。② 町と港とを体験的に結びつける場とその特色を抽出・整理する。

2 研究の方法

港の歌(164曲)、作文(14編)、絵画(20点)、文学作品(1編)、観光ガイドをデータとして、イメージ分析、モチーフ分析、情景分析を行う。次に瀬戸内を中心とした東地帯を基盤として、港とまちとの係わり地点に因る分析を行う。すなわち、本研究でまちとの一体化を考ふる港には工業港を含まない。

3 港のイメージについて

ここで言うイメージとは、現実の対象から引き出されたいくつかの物的・心的モチーフで構成される対象の類似像である(図-1)。イメージ分析の結果、港のイメージは、図-2に示す6つに分類された。これらほさらに、情緒・流通・生活イメージの3つに集約される。船の存在は、港の情緒・流通両イメージに因って重要な位置を占める。

4 港のモチーフについて

(1) 船とまち

港の歌の中に現れる港の物的モチーフは6種類である。それぞれに因る言葉の出現回数を見ると、船に因る言葉が最多である(表-1)。船は港のモチーフとしていかに重要かがわかる。また、まちも重要なモチーフだが、まちは港との取り合えで表現される傾向のあることが絵画分析(図-3)、観光ガイド分析、文学作品分析で明らかになった。

(2) 知覚の複合

港の物的モチーフとなる事象は、視・聴・嗅・触覚で複合的に体験される。出船という事象は複合的に体験されるだけでなく、汽笛を聞き、シーブに触れることにより印象的に体験される(表-2)、海についても、その体験はやはり複合的である(表-3)。

(3) 港の魅力

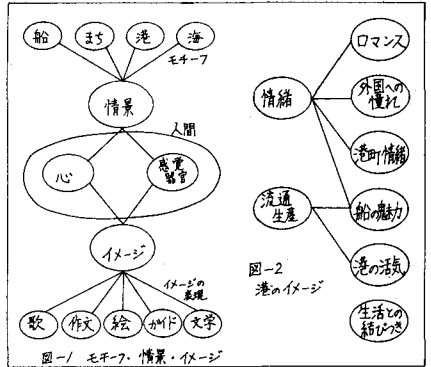


図-1 モチーフ・情景・イメージ

表-1 イメージのキーワード

キーワード	例	出現回数
船に関する言葉	出船 汽笛	220
まちに関する言葉	老町 酒場	107
港に関する言葉	波と橋 桟橋	106
天候時刻に関する言葉	夜霧 雨	102
人間に関する言葉	ロマンス 娘	61
海に関する言葉	海 かもめ	58

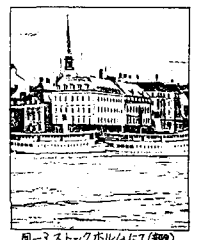


表-2 出船における知覚の複合

知覚	視覚	聴覚	嗅覚	触覚
出船	出船 入船 黒けり	汽笛 ドラ		シーブ 花束

表-3 海における知覚の複合

知覚	視覚	聴覚	嗅覚	触覚
海	海峽 北の海	海鳴り	海の香	
波	岸近く波 波間	波の音		波森沫
潮			潮のにおい	潮風

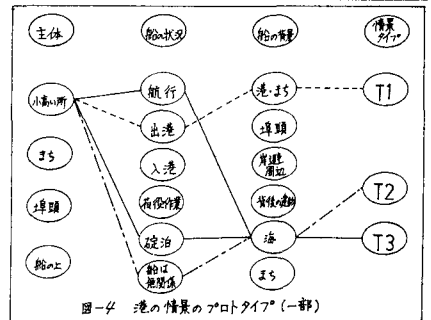


図-4 港の情景のプロトタイプ(一部)

港の魅力には、船を中心とした港そのものの魅力と、まちと港との関わりによって生ずる魅力があると考えられる。

5 港の情景について

一般に、港の情景は、船・船の情景・客体の場のうちの要素の組合せで表現できる。この組合せをもとに、港の歌や作文から抽出された港の情景のプロトタイプは10通りである。例を図-4に示す。例えばタイプ3は、港の見え方(高い丘より)、航行している船を見ている—ということを示す。

6 港の情景とイメージの関係について

表-4に、10通りの情景と6つのイメージとの対応関係を示す。情景の中で、まちの存在が不可欠であるものは5通りある。それらは港町情緒やロマンスというイメージに結びつく。まちとの関わりを大切にした港は情緒的な雰囲気をもつに違いない。また、港の活気を体験させることを念頭に置いた緑地計画を考へる時、例えば、情景T3を生かして、船の航行がよく見える位置に展望施設を配置する方が望ましいことになる。

7 港とまちとの関わり地点(図-5)

港とまちを同時に体験できる場の開発が港と市民との隔たりを狭めるだろうことは4-11から推測される。そこで、理論的考察と現地踏査に基づき、そのような場(関わり地点と呼ぶ)を7タイプ抽出した。そのそれぞれにおける体験上の特色は次のようである。

- A: まちの賑いを背後に感じつつ、港の空気に触れる。
- B: まちの賑いの中であって、港を中・遠望する。
- C: まちから離れ、まちを手前にして港を遠望する。
- D: まちと港を等距離に置いて、並列に眺望する。
- E: 港の空気にひたりつつ、振り返ってまちを見る。
- F: 港とまちの対岸側から、港を手前にまちを遠望する。
- G: まちの賑いの中で、港を感じとる(汽笛・運河)

8 結論にのぞいて(関わり地点開発の一試案)

博多港は大規模な高・工業ゾーンをもつが、中央埠頭の付根あたりには歩道や船溜り(博多船溜り)がある。また、フェリー埠頭周辺には、博多港PRセンター等の公共施設が集積しており、港湾、都市施設が共存している。船をよく見せてまちと同時にまちも眺められるべく緑地配置計画を案出してみた(図-6)。まず、船溜りの先端と、フェリー埠頭駐車場跡地(現駐車場跡地)を、関わり地点Eとして緑地整備する。次に、フェリー埠頭と船溜りを緩歩道で連絡し、周辺公共施設を一体化する。こうして開発された緑地からは、まちを背後に船溜りに停泊する小型船や発着するフェリーが見えるようになる。また、緩歩道は、公共施設集積のついでという形でまちと港に親水させる場として機能していくだろう。港の魅力を伝えるものを把握し、その体験の構造を理解した上で緑地開発をすすめるならば、港はまちに溶け込んでいくだろう。

表-4 情景とイメージの関係 ●はまち不可欠の情景

情景/イメージ	T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8	T9	T10
ロマンス			○		●			○		●
外国への憧れ		○						○		
港町情緒	●	○		●	●	●		○	○	
船の魅力								○		
港の活気			○					○		
生活への親しみ										

